印度學佛教學研究第四十二巻第二号　平成六年三月

一休に擬せられる仮名草子について

――『一休骸骨』『一休水鏡』を中心として――

飯塚大展

一　問題の所在

本稿では、『一休骸骨』（以下『骸骨』）及び『一休水鏡』（以下『水鏡』）をとりあげ、そのテキストの問題について考察を加える。本稿は上記の二書の註釈的研究を行なう為の準備作業として位置づけられる。

一般にこの両書は、仏教学者により「仮名法語」として分類され、国文学者は「仮名草子」の範疇に入れるものである。仏教学における「仮名法語」の定義が甚だ曖昧であることから、ここでは「仮名草子」として扱うこととする。仮名草子とは、西鶴を画期として、室町期のお伽草子と西鶴以降の浮世草子とに挟まれた、江戸時代初頭から天和年間（一六八一～）に至る約八十年間の小説を指すとされる。野田寿雄氏の説によれば、大まかに次の三種に分類される。㈠啓蒙教訓的なもの、㈡娯楽的なもの、㈢実用本位のものの三種であり、それぞれ更に細分されるが、ここではとりあげない。『骸骨』『水鏡』はいずれも仏教の教義による啓蒙教訓的なものとして位置づけられる。特に『水鏡』の中の「二人比丘尼」は、初学者に対する教義問答に終始していると言える。又、一休作に擬せられる『一休咄』『一休関東咄』などは㈡に分類され、説話集的なものであり、滑稽な小咄集である。

仮名草子は古活字版に始まり、整版が多数出ることによって盛んとなるのだが、『水鏡』においては、五種の古活字版が知られており、一休のものとされる仮名草子としては、その成立が早いものとされる。同様に『骸骨』においても、京都大学附属図書館蔵『一休清語』が慶長期の古版本と推定されている（『清語』は仮称）。

しかし、岡見正雄氏により『幻中草打画』（以下『草打画』）の翻刻がなされて以降、上掲の二書は『草打画』の改作、即ちパロディー、バリエーションと考えられるようになった。

以下、三者の比較検討を通して、『骸骨』と『水鏡』の位置づけを考えてみたい。

二　『幻中草打画』について

既に指摘したように、『草打画』は岡見正雄氏がはじめて紹介されたものである。以下、岡見氏の翻刻及び解題によれば、『草打画』は墨絵一巻であり、奥書に「康暦二年〈庚申〉五月廿□□」と見え、「若しこの奥書を信じるとしたら、康暦二年（一三八〇）即ち南北朝後期のものであるが、或いは室町後期の又写しと考えられ、自由に絵の中に会話体の詞句を書入て行く絵が一箇所あり、仏教的な法話物であり、善教房の如き、法語的な絵巻に類似している点があり、私はこれを一見した時に、『一休骸骨』の異本かと思ったのである。（中略）しかるに『看聞御記』の紙背文書を見るに及び、『幻中草打畫』なる名が『堀江物語』や『酒天童子物語』と共に応永二十七年（一四二〇）の物語目録の中に見出される」という。

次に『草打画』の構成と内容について考えてみたい。構成は、大まかに前半と後半とに二分される。

前半は、有為転変する世界の無常を感じて行脚の僧となった主人公が、その途中名も知らぬ三昧原の仏堂に一泊して、夢の中で骸骨と共に過した体験を回想するのであるが、その回想シーンは、「只いまかしつきもてあそふ、かはのしたに、此骸骨をつゝみてもちたる□はとしりて、この絵を御らんすへし」という、絵解きのスタイルをとっている。その回想部分は、骸骨の様々な姿態が描かれ、その余白に詞句が配されるという体裁である。

前半は「能〻可心得」で終り、「破戒なる僧比丘尼のあり」より後半は始まる。登場人物も前半とは異なり、破戒の比丘尼（行脚の比丘尼）がある庵を訪ね、その庵主である「七十はかりの比丘尼」と仏教の教義に関する問答をするという体裁である。

内容的に興味を惹起されるのは、禅宗の用語が散見されることである。たとえば、「めん〳〵のやうなる世をば捨たる人も、坐禅をは物うく思ひ、工夫をなさすして（下略）」、「もし一心を明めは、昔今の一切の罪を滅して、本分にかなひ候へし」、「又、念の起る時は、古人の詞を公案にして、是にて相念をさまたけむとする人あり、古人の公案を人に与ふる事は、かやうの要事に非す（下略）」、「此はなは、これ三世の諸仏の世に出て、一乗の法との給は、此花の心也、天竺の廿八祖、唐土の六祖より以来、一大事といふは、此事也」、というように、一大事・公案・坐禅・工夫といった用語が見え、思想的にも禅宗的色彩が濃いものと言える。あくまで想像の域を出ないのだが、この絵巻の作者は禅宗の教義にある程度

通じていたと考えられ、恐くこの禅宗につながるという点から、一休がその作者に擬せられる『骸骨』『水鏡』が出来する可能性が生まれたのではないか。又、この絵巻の成立が、南北朝期、或いは室町前期とすると、禅宗における絵巻としては極めて早いものと思われ、興味深い。

最後に、『草打画』は前半・後半の二話に分かれているのだが、前半はほぼ『骸骨』に相応し、後半は『水鏡』の中の「二人比丘尼」の部分に相応する。又、『骸骨』『水鏡』が共に『草打画』を承けている箇所もある。

三　『一休骸骨』について

近年、禅文化研究所より『一休骸骨』が発行され、その新な巻子本として柿崎家本を紹介し、翻刻及び訳註がなされた。柿崎家本について、早苗憲生氏は「柿崎家本は『一休骸骨』が梓行される以前の古い形を伝えた善写本として資料価値が高いことは言うまでもない」とされるが、原本を見ていないので、意見はさし控えるべきかと思うが、やはり検討の余地は未だ残されていると思う。旧吉沢義則氏蔵『一休骸骨』（現京都大学蔵）のテキストの価値との関連をも含めて、これから解明されるべき課題であると考える。本稿では仮に旧吉沢本の『骸骨』を底本として用いることとしたい。

既に指摘したように、『骸骨』は『草打画』の前半部分の改作と考えられる。両者の比較によりその異同を見るに、『骸骨』の冒頭部分と末尾部分とに相異する箇所が多く見られ、その外の部分については字句の異同は少なく、若干の省略がなされているが、ほぼそのままのモチーフとして扱っている。

因みに冒題の「うすすみにかく、章のうちにこそ、万法ともにミゆるなるへし。それ初心の時、座禅を専になすへし。（中略）かやうのことをしらすんは、たちまち、ちこくにはいるなり」、という部分は附加されたものである。

次に、『骸骨』の本文が『草打画』に省略を加えて成立している部分で、省略がうまくなされていない為に、意味が判然とせず、結構に破綻を呈している箇所を指摘してみたい。それは前述の回想シーンの導入部分である。主人公は三昧原の仏堂に一泊し、暁方にまどろみ、夢を見るに、ある骸骨と出逢い、その骸骨が出家し、悟って故郷に帰り、説法教化したのを最初から最後まで見聞したというのが本旨であるが、『骸骨』では判然としない。

『骸骨』では、

「しかも、つねにあひともなひけるかいこつ、世をすて法をもとむる心ありて、あまたの別をたつね、あさきよりふかきにいりて、我心のみなもとをあきらむるに、耳にミてるものハ、まつ風のをと、まなこにさえぎるものハ、けい月のまくらに残る、そも〳〵、

いつれのときか、ゆめのうちにあらさる、いつれの人か、かいこつにあらさるへし」

『草打画』では、前半はほぼ同じであるが、

「常に相件ひける骸骨、世をすて□□□求る心ありて、あまた知識に尋あ□□、浅より深きに入て、我心の源を明め、故郷に帰て説法教化せしを、初よりおはりに至まて、つきそひて見きゝ侍しに、□□□人のよふ心ちして、俄に驚ぬ、一の□□むなし、耳に満る物は、松風の梢をゆ□□、五夜正に明なんとす、眼に遮る物は、けい□の枕に残る影、僅に片時の間にをきて、普く多年の事をみる、抑、いつれの時か、夢の中に非さる、いつれの人か、骸骨に非る」

というように、夢から覚めての状景がスケッチされ、回想シーンへと進むのであるが、この部分が『骸骨』では省略されている為に、結構に破綻をきたしている。

次に『骸骨』『水鏡』が共に『草打画』を相承している部分をあげる。『骸骨』の文では、

「人、このふしんをしらぬなり、たとへは、人の父母ハ、ひうちのことし、かねはちゝ、石ははゝ、火は子なり、これをほくそにたてゝ、たきゝ、あふらのゑんつくるときハ、きゆる也、ちゝはゝ、あひあそふとき、火のいつるかことし、ちゝはゝも、はしめなきかゆへに、ついには、火のきゆる心に、うするなり」

上述のように、『骸骨』は『草打画』の前半部分を改作しているのだが、必ずしも成功しているとは言い難い。『骸骨』においては意味が判然としない部分も、『草打画』を勘案することにより解釈することが出来るという具合である。

四　『一休水鏡』について

今日一般に『一休水鏡』といわれるものは目無草、水鏡、二人比丘尼の三つの部分から成り立っており、それぞれ独立しているものを合して一部となすものである。

川瀬一馬氏によれば、『水鏡』の古活字版は五種類存するという。第一種本（慶長頃刊、大本）、第二種本（慶長中刊、大本）、第三種本（慶長、元和中刊本）、第四種本（元和、寛永中刊本）と、新別種（寛永中刊、大本）の五種である。ここに底本とするのは、大東急記念文庫蔵本（第一種本）である。

『骸骨』との比較からみると、「目無草」とは無関係であり、「水鏡」とは和歌三首が同じであり、「二人比丘尼」については前述の通りである。

注目すべきは、「二人比丘尼」と『幻中草打画』後半との関係である。結論的に言えば、両者の類似性は極めて高い。『草打画』の導入部分が、「二人比丘尼」では簡略化され、すぐに問答が展開されているのを除けば、『草打画』そのままという部分が多い。

「二人比丘尼」の問の内容は以下の通りである。

第一問、一大事因縁とは。

第二問、人のはしめは、いかなるものか。
第三問、どういう者が地獄に堕ちるのか。
第四問、何を道心というのか。
第五問、出家は遲斎を根本とすべきか。
第六問、檀那をどのように教化すべきか。
第七問、人は死後どうなるのか。
第八問、真実の仏法とはいかなるものか。
第九問、釈迦の五十年一字不説と拈華微笑の話の意味は。

以上のように、「二人比丘尼」の問答の内容は仏教（禅宗）の初学者に対する啓蒙教訓的なものと言える。

最後に、本稿では『骸骨』『水鏡』のテキストの最良なるものを結論的に導き出したかったのであるが、テキストの収集が十全でなく、系統分類することも出来なかった。今後の課題としたい。

［参考資料］

(A)『幻中草打画』（国見正雄氏翻刻、『中村幸彦博士記念論文集』所収）

(B)『一休水鏡』

(1)大東急記念文庫蔵『目無草、附水鏡　二人比丘尼』（中村幸彦氏解題、『大東急記念文庫善本叢刊近世篇一、仮名草子』所収）

(2)赤木文庫蔵『一きうの水かかみ』（田中伸氏解題、『近世文学資料類従、仮名草子篇(10)』所収）

(3)東洋文庫蔵『一きうの水かがみ』（市古貞次氏解説、『岩崎文庫貴重本叢刊〈近世篇〉第二巻、仮名草子』所収）

(4)国立国会図書館蔵『一休水鏡』（浅倉治彦氏翻刊、解説、『仮名草子集成第五巻』所収）

(C)『一休骸骨』

(1)京都大学附属図書館蔵『一休清語』（今回飯塚レジュメ翻刻）

(2)刑部朱実氏蔵、柿崎家本『一休骸骨』（柳田聖山氏編訳、早苗憲生氏解説）

(3)松ヶ岡文庫蔵『一休骸骨』（古田紹欽氏解説）

［参考文献］

(1)川瀬一馬『古活字版の研究』
(2)森大狂『一休和尚全集』
(3)渡辺守邦、渡辺憲司『仮名草子集』（新日本古典文学大系74）
(4)岡雅彦「一休俗伝考――江戸時代の一休説話」（『一休・蓮如』）
(5)同右「江戸時代一休関係著作年表」（『国文学研究資料館紀要』8）

［追記］

資料の閲覧に関して、御芳情を賜りました関係所蔵者各位に謝意を表します。特に今回のテーマを考える機会を与えてくれました、平野宗浄先生に甚深の感謝の意を表します。

（曹洞宗研究員）

〈キーワード〉『一休水鏡』、『一休骸骨』、『幻中草打画』